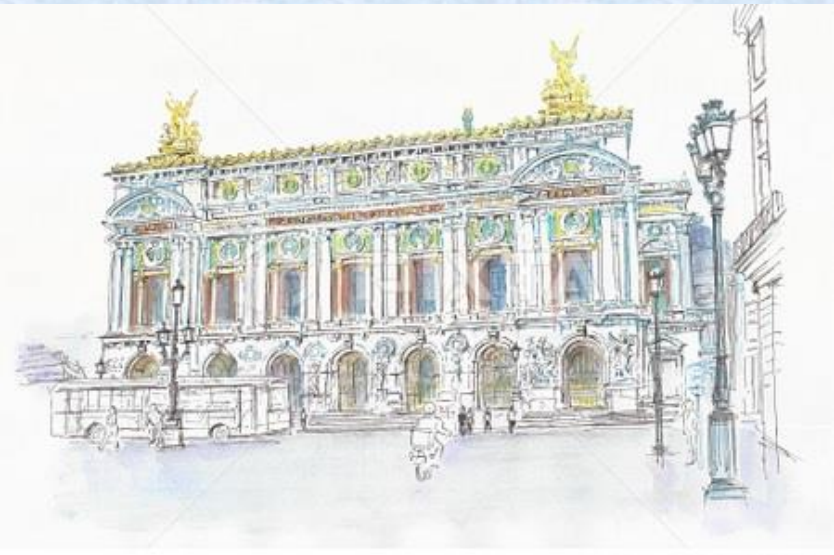
大学院 歌曲の祭典



演奏　洗足学園音楽大学大学院 声楽コース 歌曲研究履修生

2022 年 1 月 9 日(日)　13:00 開演　(12:30 開場)

洗足学園　シルバーマウンテン１F

⚠新型コロナウィルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
・大声や対面での会話はお控えください。
・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

主催　洗足学園音楽大学・大学院

◇　プログラム＆解説　◇

歌曲研究　ドイツ　　**指導教員　宮部 小牧／ピアノ　川村 沙耶香**

浅谷 里美（1年）
F.シューベルト ／ トゥーレの王様
Franz Schubert (1797-1828) // Der König in Thule D365 (Goethe)

F.シューベルト ／ 糸を紡ぐグレートヒェン
Franz Schubert (1797-1828) // Gretchen am Spinnrade D118 (Goethe)

〈トゥーレの王様〉の詩は、ゲーテの「ファウスト」第1部第8場「夕方」で、グレートヒェンによって歌われる。
グレートヒェンを意のままにしたいファウストはメフィストフェレスと彼女の部屋に忍び込み宝石の入った小箱を置いていく。何も知らず部屋に戻って来たグレートヒェンは、着替えをしながらこの歌を口ずさむ。
トゥーレとは、北の果てにある架空の島国であり、「魔王」と同じくゲーテの北方への関心が生んだものと言われている。
曲は有節形式であり、各形式、8小節ごとに区分され、それらは、A-A-B-C の形式を作っている。B の後半部分の長調への転調は、素朴な民謡調の音楽に美しさをもたらす。
伴奏は、4分音符を虚飾なく淡々と奏し続ける。

〈糸を紡ぐグレートヒェン〉は1814年に作られた、シューベルト最初のゲーテの詩による歌曲である。
詩は「ファウスト」第1部、グレートヒェンの部屋の場で、グレートヒェンによって糸を紡ぎながらファウストへの想いが歌われる。
曲は変奏有節形式である。伴奏の十六分音符の流れは糸車の回転の様を、最低音のリズムはグレートヒェンの鼓動を表現している。静かに苦悩を歌い、次第に感情の高ぶりをみせ、一旦糸車が止まったのち、再び寂しさを取り戻す。そして再度思い焦がれ感情は高ぶるが、この運命を受け入れたかのように静かに歌い終わる。シューベルトらしい歌詞に即した自然な調性の流れで、オペラ作品のような劇的な展開で表現している。

鈴木 彩生（2年）
R.シュトラウス ／ 私は愛を抱いて
Richard Strauss（1864-1949）// Ich trage meine Minne Op.32- 1 （Henckell）

R.シュトラウス ／ 矢車菊
Richard Strauss（1864-1949）// Kornblumen Op.22-1（Dahn）

〈私は愛を抱いて〉は、ヘンケルによる《5つの歌曲》の第1曲目である。3部形式で形成され、中間部に情熱的な表現がされている。悪意さえも打ち勝てないほどの偉大な人への愛について歌われており、親しみやすい旋律が抒情的で純粋な愛を表現している。

〈矢車菊〉は歌曲集《乙女の花》の第1曲目である。全4曲で構成され、それぞれ異なる性格の女性に見立てられた4種類の花がそれぞれのテーマになっている。矢車菊は青く鮮やかで可憐な花で、4月から7月に咲く。純粋で高貴な女性のおおらかな愛情が、4分の4拍子のゆったりとしたフレーズに甘美に表現されている。

歌曲研究　フランス　　指導教員　土屋 雅子／ピアノ　服部 真由子

西村 理菜（1 年）
G.フォーレ ／ 牢獄
Gabriel Fauré (1845-1924) // Prison (Varlaine)

C.ドビュッシー ／ マンドリン
Claude Debussy (1862-1918) // Mandoline (Varlaine)

〈牢獄〉は、ポール・ヴェルレーヌが投獄されていた時に書いた詩に、ガブリエル・フォーレが 1894 年に作曲。ヴェルレーヌは文学好きのマチルド・モテと結婚し、一時は子供も授かり幸せに過ごすが、その 1 年後に天才的詩人ランボーと出会い、その才能に魅了され出奔した。ところが、ベルギーのホテルで喧嘩の末に拳銃発砲事件を起こし、撃たれたランボーは左手を負傷し、ヴェルレーヌは投獄された。この詩には牢獄の窓から見える景色、カトリックの宗教的要素、自分がしたことへの後悔などが語られている。

〈マンドリン〉は、 1 曲目と同じヴェルレーヌの詩であるが、〈牢獄〉とは異なった雰囲気の内容である。クロード・ドビュッシーが 1882 年に作曲。この詩は 18 世紀の宮廷画家ヴァトーの雅宴画をモチーフにした詩集《雅な宴》の中の 1 篇で、薔薇色と灰色と表現された月明かりの下、男女が恋の駆け引きをするような様子が描かれている。ピアノはマンドリンを調弦するような音からはじまり、かき鳴らすような音や、柔らかな音型が詩の内容に沿って変化て行き、最後は調弦の音で余韻を残すように終わり、詩と音楽が相まって優美な雰囲気の作品である。

YOU PAN　ユウ ハン（2 年）
A・ルーセル ／ ときめき
Albert Roussel (1869-1937) // Cœur en péril (Chalupt)

アルベル・ルーセルは 1869 年にルーアンに生まれ、印象主義から新古典主義に進み、ラヴェルとともにフランス楽壇をリードした作曲家である。色彩豊かな素晴らしい曲を数多く残している。詩はルネ・シャリュによるもので、ルーセルの他にも同時代の多くの作曲家が彼の作品に音楽を付けている。〈ときめき〉は、「世間では、位の高い女王や、姫君や、侯爵夫人が噂になるようだけれど、僕にとってはどうでも良い」と明るく華やかに歌い始める。だが曲の最後では、落ち着いた雰囲気へと変化し「でも、君が一度だけでも僕にウインクすれば、僕の心は破裂しそうなほど鼓動するのだ」と甘く愛を語りかける。

渡辺 華子（2 年）
F.プーランク ／ セー
Francis Poulenc (1899-1963) // C (Aragon)

ルイ・アラゴンの詩にフランシス・プーランクが 1943 年に作曲した〈C〉は、第二次世界大戦にまつわる作品の一つで、パリがドイツ軍に占領されている時期に書かれた。題名の〈C〉とはパリのロワール川流域のセーという実際の町の名で、そこにかかる 4 つの「セーの橋」によってつながれた、実際に激戦地となった場所と言われている。曲の冒頭と最後には「僕はセーの橋を渡った」という詩句が歌われるが、後半では不安定な音型が使われ、曲を通して歌われる戦争の悲惨さが色濃く現れている。また詩には”sé“ ”cé“といった同一のセの音の脚韻が多用されており、それが旋律の動きにも反映され、曲全体を通して「セーの橋」が象徴的なものとなっている。

村田 涼（2 年）
E.シャブリエ / 幸福の島
Emmanuel Chabrier (1841-94) // L'île heureuse (Mikhaël)

〈幸福の島〉は、1890 年にエマニュエル・シャブリエ（1841-1894）によって作曲された《6 つの歌曲》の 4 曲目である。この歌曲集は、ロズモンド・ジェラールとエドモン・ロスタンの詩で作られているが、4 曲目は、友人だった詩人のエフライム・ミカエル(1866-90)が急逝したことで、シャブリエ自身が急遽遺作の中からこの詩を選び作りかえた。この詩は、18 世紀の宮廷画家ヴァトーの雅宴画〈シテール島への船出〉から触発され、恋人たちが喜びに満ちた場所を夢見て、入江から大海原、そして幸福の島へと進んでゆく様子が描かれている。シャブリエの歌曲の中で最も知られ、よく演奏される作品である。

長島 彩（2 年）
E.ショーソン / リラの時
Ernest Chausson (1855-99) // Le temps des lilas (Bouchor)

エルネスト・ショーソンは 20 年余りの作曲生活の中で、約 50 曲の歌曲を書き残している。完成までに約 10 年もの年月を要した独唱とオーケストラのための《愛と海の詩》は、モーリス・ブショールの詩による 3 部からなる大作である。この〈リラの時〉は、第 3 部の〈愛の死〉の終曲部であり、全曲の完成に先だってピアノ伴奏版で単独に出版され、アンリ・デュパルクに献呈されている。詩は、リラやバラの花が咲く時期は今年の春にはめぐって来ないだろうと切なく言葉を紡ぎ始める。そして楽しく甘い春の季節、輝いていた春、私達の愛の花はもうしおれてしまったと過ぎ去った 2 人の恋を戻らぬ花の季節と重ね合わせている歌である。

～ 休憩 ～

歌曲研究　日本　　指導教員　悦田 比呂子／ピアノ　坂元 陽子

SHU JINBIN　ジョ キンヘイ（1 年）
山中 晋平(1887-1952) ／ カチューシャの唄（島村抱月、相馬御風）

平井 康三郎(1910-2002) ／ ゆりかご（平井康三郎）

〈カチューシャの歌〉は、1914 年（大正 3 年）に発表された日本の歌謡曲、ならびに同楽曲を題材にした同年製作・公開の日本の短篇映画である。楽曲の作詞は島村抱月（1871-1918）と相馬御風（1883-1950）、作曲は中山晋平（1887-1952）である。当初は島村が作詞を手掛けていたのだがうまくいかず、1 番を島村が、2 番以降は相馬が作詞して最終的に相馬がまとめる形になったと、後に詩人である藤浦洸は芸術座の俳優であった笹本甲午から聞いたそうだ。ヨナ抜き音階のような伝統的な日本の音楽表現や、リード形式の西洋音楽の手法を取り入れている。

〈ゆりかご〉は平井康三郎（1910-2002）作詞、作曲した曲である。この曲は大変身近にある風景を歌っており、曲中でのリズム変化が少ない。歌詞は言葉の高低とメロディーラインが全てにおいて一致をしているわけではないが、感情の表現において変化しているということが理解しやすい旋律になっている。それに加え、解釈に幅を持たせて歌唱者独自のストーリーを考えることが可能である。また、息遣いを視覚化する際に、言葉の流れ、音楽の流れを理解しやすい。

QU YUQI　クツ ウキ（1 年）
小松 耕輔(1884-1966) ／ 母（竹久 夢二）

山田 耕作(1886-1965) ／ 赤とんぼ（三木 露風）

小松耕輔（1884-1966）は東京音楽学校（現・東京芸術大学）出身で、日本初のオペラ《羽衣》を作曲したことで有名な作曲家である。学習院などで長く音楽教育に携わり、合唱活動にも貢献し、幼少期の日本楽壇組織の発展につとめた一人。1917 年（大正 6 年）ごろ竹久夢二（1884-1934）の詩に作曲した。〈母〉は故郷の母を偲ぶ詩の心をよく表現している。成長して遠くに行った息子はなかなか帰らず、いつ帰るかわからない息子を母は待ち続けている。

〈赤とんぼ〉は三木露風の作詞、山田耕輔の作曲による、日本の代表的な童謡の一つである。夕暮れ時に赤とんぼを見て昔を懐かしく思い出すという、郷愁に溢れた歌詞である。三木露風が大正 10 年に発表したこの詩は、露風自身の幼少時代の思い出を正直に書いたものと思われる。実際、露風は 5 歳の時に両親が離婚し、以降母親とは生き別れで祖父に養育されることになったが、実際は子守り奉公の姐やに面倒を見てもらっていた。第一節の「夕焼け小焼け」は幼少時代の思い出で、最後第四節の「夕焼け小焼け」は、あれから幾年月を経た今見る風景であり、実に時空を越えた詞の内容となっている。

杵鞭 遊（1 年）
中田 喜直(1923-2000) ／ 《日本のおもちゃうた》より　海ほおずきと少年（岸田 衿子）

中田 喜直(1923-2000) ／ 《日本のおもちゃうた》より　紙風船（岸田 衿子）

中田喜直は歌曲の名作を数多く作曲しているが、ピアニストとしての活動していた。伴奏から細部にこだわっていることが感じられ、ピアニストの音色作りに創意が必要だと考えられる。〈海ほおずきと少年〉は《日本のおもちゃうた》の全 7 曲で構成される曲集の第 4 曲目である。「おもちゃうた」といっても〈海ほおずきと少年〉は童歌のような内容ではなく、楽器や海から想像される自由かつファンタジーさを感じさせる曲である。詩は、「12 歳のモオツァルト」と歌われ、前奏はモーツァルトそっくりのピアノの音型が施され、まるで他の楽器が実際に鳴っているような伴奏が付けられている。まさに「おもちゃ」の様な音色を奏でる感性の細やかな曲である。

〈紙風船〉は〈海ほおずきと少年〉と同様の曲集《日本のおもちゃうた》の終曲である。ソプラノの大蔵担子の委嘱により 1966 年 11 月に行われた彼女のリサイタルで初演された。その年の 10 月から 11 月にかけて作曲された。童話作家でもある詩人の岸田衿子は、数多くの詩集を出版し、戦後間も無く谷川俊太郎たちと共に詩集も出している。彼女の書く「おもちゃうた」は郷愁にあふれた大人のための詩であり曲であると言える。静かに美しく書かれている旋律はまるで紙風船がふくらんでいるかのように音型が進み、幼いころの記憶が蘇ったように叙情的へと変化する。最後は紙風船と自分を重ねてやがて解放された様な自由さが感じられる。

GUO DACHU　カク ダイソ（1 年）
本居 長世(1885-1945) ／ 白月（三木 露風）

中田 喜直(1923-2000) ／ サルビア（堀内 幸枝）

〈白月〉(はくげつ／しろつき)は、三木露風の詩に基づき、本居長世が 1921 年(大正 10 年)に作曲した日本の歌曲である。私はこの曲を歌うと故郷の月や私のおじいさんを思い出す。おじいさんは毎晩私に物語を聞かせてくれる優しい人で、切なげな曲調が私のおじいさんと重なりとても懐かしく思う。

中田喜直の〈サルビア〉は、彼が 37 歳(1960 年)の時に作曲された。真っ赤な花は私のかつての初恋の感情。深く心に刻んだ想いと共に、3 年間素晴らしい時間を過ごした。最後には別れたが、私にとってあの時間はとても素晴らしい記憶である。そんな過去を思い出させてくれる曲だ。

渡辺 華子（2 年）
中田 喜直(1923-2000) ／ 二人のモノローグによる歌曲集《木の匙》より　悲しくなったときは（寺山 修司）

〈悲しくなったときは〉は、二人のモノローグによる歌曲集《木の匙》の第 10 曲目で、朝日放送の委嘱により、作曲家の中田喜直と歌人で劇作家の寺山修司が共同で制作を行った作品である。ソプラノとバリトンの歌唱により、全 11 曲を通して若い夫婦の物語が語られる。ソプラノによる最終曲でもある〈悲しくなったときは〉では、海と人生が主題として描かれており、「海を見にゆく」という詩句が詩全体を通して現れる。海は人生と同じように穏やかな時もあれば嵐のように荒れ狂う時もあるという事が、詩の持つ力と音楽で表現され、「海」という存在が不変的なものとして象徴されている曲である。

YOU PAN　ユウ ハン（2 年）
平井 康三郎(1910-2002) ／ ふるさとの（石川 啄木）

昭和 10 年 12 月岩手県前沢に招かれた作曲者は、主催者の太田氏から郷土の詩人啄木の歌をこの機会に演奏したいとの特別の依頼で夜行列車の寝台で作曲し、翌日前沢の学校の新しいピアノで初演された。この曲は石川啄木の詩に平井康三郎が曲を付けたこの〈ふるさとの〉を思い浮かべるのではないだろうか。三木露風が"おとめご"の想いを借りて心を詠んだのに対し、石川啄木は現在の自然を昔と重ね想いを詠むように感じた。そこには万感の想いが込められているように聴こえて来る。子供の頃に何気なく歌っていたものが、大人になってはじめて理解出来るようになってくる、それが分かり易いメロディーの付けられた平井康三郎の〈ふるさとの〉なのだと思う。

長島 彩（2 年）
別宮 貞雄(1922-2012) ／ さくら横ちょう（加藤 周一）

加藤周一が作詞した〈さくら横ちょう〉は「マチネポエティク詩集」の中の一遍で、日本語に韻を踏んで詩を書くことを試みた作品である。別宮貞雄の他にも中田喜直が作曲した曲としても広く親しまれている。中田に比べ、別宮は愛する人を今でも忘れられずどこか切ない曲調で、語るような音型で構成されている。満開の桜の中で過去の恋を思い出している詩は、もう君に会う時は来ないだろう、「その後どう」と言っても何も始まらないから桜でも見よう。華やかな桜と失われた昔の恋の詩が何とも言えない寂しさと美しい情景を思い浮かばせる曲である。

～　休憩　～

石川 敦也（2 年）
小林 秀雄(1902-83) ／ 瞳（薩摩 忠）

武満 徹(1930-96) ／ 島へ（武満 徹）

小林秀雄 1931 年東京都出身の作曲家。「落葉松」をはじめとする歌曲・合唱曲や童謡「まっかな秋」、オペラ、器楽曲、小学校校歌など数多くの楽曲を手掛ける。66 年に中田喜直らと「波の会」（後に「新・波の会」と名称変更、現日本歌曲振興波の会）を創設し、会長を務める。愛知県立芸術大教授などを歴任。作品〈瞳〉は 1967 年作曲。初演は 1967 年歌手の荒川美代子によって演奏された。なお本曲は作曲者自身により、女声合唱曲に編曲されている。作曲者が追及した「歌は発音するのではなく発語をするのだ」という【コトバのはたき】が象徴されており、メロディーとハーモニーの絶妙なバランスの叙情的な曲である。

武満徹 1930 年東京生まれ。幼少時代を父親の勤務地である満洲の大連で過ごす。 1937 年、小学校入学のために単身帰国する。長じて戦時中に聞いたシャンソン《聴かせてよ、愛のことばを》で音楽に開眼。戦後、作曲を志して清瀬保二に師事するが、実際にはほとんど独学で音楽を学んだ。作品〈島へ〉は 1983 年 11 月 5 日放送の NHK テレビドラマ「話すことはない」のために作曲。ドラマの登場人物を作詞家として設定したために劇中で使用する詞として参考に提供されたものから武満が気に入ったのが「島へ」であった。旋律だけではドラマのエンディングで使われたが、歌入りは同年合唱編曲として発表された。

ZHANG YIJIAO　ジャン イジャオ（2 年）
橋本 國彦(1904-49) ／ お菓子と娘（四条 八十）

武満 徹(1930-96) ／ 翼（武満 徹）

武満徹(1930-96)の作詞と作曲による〈翼〉は、1982 年に東京の西武劇場にて上演された。 原作者のアーサー・コピットは、自身の父親が脳卒中になったことから、脳卒中と言語障害についての戯曲である、この「ウィングス」を書いた。この作品は、自由への査証を得るためのもので、精神を固く閉ざされたものにせず、いつも柔軟で開かれたものにしておきたいという希いにほかならない。

〈お菓子と娘〉は、西条八十作詩、橋本国彦(1904-49)作曲による歌曲である。お菓子と娘について巴里の娘たちは、本当にお菓子が好きである。街頭の菓子屋を覗くと、粋な姿の娘たちが立ちながら、無遠慮にムシャムシャたべている。その態度が実に天真爛漫で、私はこの作品で彼らの明るい食欲をうたってみた。「ラマルチーヌ」は、19 世紀のロマン派の先駆で、ブーローニュの森に近い街角に銅像があった。

CHEN YINGJIE　チン エイケツ（2 年）
木下 牧子(b.1956) ／ 抒情小曲集《月の角笛》より　うぐいす（武鹿 悦子）

武満 徹(1930-96) ／ 小さな空（武満 徹）

作曲者の木下牧子は、日本の作曲家で、管弦楽、吹奏楽、室内楽、声楽など幅広いジャンルにわたって作品を発表し、高い支持を得ている。 叙情小曲集《月の角笛》の第一曲に収められたのが〈うぐいす〉だ。楽譜には、1998 年 2 月に牧子さんが書かれた文章が載っている。当時の日本の合唱界や、牧子さん自身の作曲の足跡等を鑑みて、あれこれ悩まれたあと、シンプルでしかも心に響く"歌"を書くことが一番新鮮なことではないかと思われて作られた曲たちだ。曲は春から冬へ季節が移っていくように配置されてある。全部で 12 曲。

武満徹は戦後日本代表する作曲家の一人だが、未だ語られることの少ない人物である。〈小さな空〉は昭和 37 年、連続ラジオドラマ『ガン・キング』の主題歌として書かれた。子どもの頃の懐かしい感情に、ふと胸を突かれるような歌である。「青空みたら」の出だしから素敵だが、繰り返しの「いたずらが過ぎて、叱られて泣いた、子供の頃を思い出した」のところが何とも良い余韻を残して終わるので、実にシンプルな曲にも関わらず非常に印象的な曲だ。

後藤 ゆずか（2 年）
髙田 三郎(1913-2000) ／ 《ひとりの対話》より　くちなし（高野 喜久雄）

團 伊玖磨(1924-2001) ／ 《わがうた》より　紫陽花（北山 冬一郎）

〈くちなし〉は 1966 年に髙田三郎によって作曲され、高野喜久雄の詩による歌曲集《ひとりの対話》全 6 曲の終曲に収められている。《ひとりの対話》は生きることへの厳しい自問自答を書いた曲集で、〈くちなし〉は亡き父の言葉を大切に紡いだ曲となっている。くちなしは熟しても実が開かない事からその名前が付けられ、曲の終盤では「くちなしの実のように ひたすらに焦がれ生きよ」という父の言葉がある。クリスチャンであった髙田三郎がここでいう「父」を自らの信仰と重ね合わせ、父であり神でもあるように作曲したと考えられる。

〈紫陽花〉は歌曲集《わがうた》全 5 曲の終曲に収められている。紫陽花の花言葉の一つである"無常"が、團伊玖磨の音楽によって華やかで躍動的な音楽として特徴的に書かれている。ある七月に紫陽花の花を眺め目も眩むような太陽の下、二度と会うことができない人に対して切ない想いを歌っている曲で、この「人」は自身の愛する人と捉える事が出来るが、歌曲集の一つ前の曲が〈追悼歌〉という戦争の曲であるため、戦争で亡くなった愛する人だと解釈することもできる。

脇屋敷 美里（2 年）
髙田 三郎(1913-2000) ／ 《パリ旅情》より　市の花屋（深尾 須磨子）

木下 牧子(b.1956) ／ 夢みたものは…（立原 道造）

〈市の花屋〉は、高田三郎作曲、深尾須磨子作詞《パリ旅情》の第 6 曲である。髙田三郎は、1913 年から 2000 年を生きた日本の作曲家、指揮者である。合唱曲を中心に作曲を行ったほか、自作を中心に指揮者としても活躍した。作詞家の深尾須磨子さんは 1888 年から 1974 年まで生きた詩人である。戦前、戦後、パリに多数外遊した《パリ旅情》では、パリにいる間に、自身が見た光景、そこで生活する人々の姿、心意気を詩で表現している歌詞である。〈市の花屋〉は下町風の飾らない、活気がみなぎるような、おかみさんが生き生きと描かれているのが魅力的である。

〈夢みたものは･･･〉は、木下牧子作曲、立原道造作詞の、元は合唱曲である。木下 牧子は、日本の作曲家である。管弦楽、吹奏楽、室内楽、声楽など幅広いジャンルにわたって作品を発表し、高い支持を得ている。立原道造は、昭和初期に活躍した詩人である。結核のためわずか二十四歳で世を去った。歌詞には、ささやかな幸せや愛に無上の喜びを感じる繊細な詩人の魂が宿っているようだ。明るくのびやかな山村の風景や風物は東京育ちで病弱だった立原をやさしく癒してくれたのだろう。

村田 涼（2 年）
團伊玖磨(1924-2001) ／ はる（谷川俊太郎）

木下牧子(b.1956) ／ 《花のかず》より　竹とんぼに（岸田衿子）

〈はる〉は、1954 年に團伊玖磨が作曲し、同年三宅春恵によって初演された。詩は、谷川俊太郎(1931-)の 1952 年刊行の第一詩集「二十億光年の孤独」の中の 1 篇からとられたものである。はなをこえ、くもをこえ、そらをこえと、世界が少しずつ広がっていき、宇宙の神秘、自然の恵みへの感動と感謝を、春の静かなあたたかさの中で神に語り掛ける。團伊玖磨の歌曲の中では単独曲としてもっともよく歌われている作品である。

〈竹とんぼに〉は、岸田衿子(1929-2011)の詩に木下牧子が曲をつけた、全 9 曲から成る歌曲集《花のかず》の 7 曲目にあたる。この歌曲集は、優しさ、切なさ、幻想、言葉選びのユーモアといった様々な表情と奥深い世界をシンプルな言葉で表現している。オリジナルは歌曲作品だが、先に同声 2 部合唱曲版が音楽之友社から出版され、しばしば演奏されている。作詞者の岸田衿子は、20 代から一貫して、幼児向けの絵本の制作やそれらの翻訳、詩作に取り組んできた。この作品からも、子どもを見守る親の切なくも温かい心情が感じられる。